

一株のあじさいから

【中学校第一学年】

「はあ、ごみ拾いの時間、早く終わんないかなあ。」

今日は、月一回のクリーン作戦。僕たち陸上部が、朝練の時間に学校の周りのごみ拾いをする日だ。学校周辺には、細々としたごみがたくさん落ちている。クリーン作戦直後はきれいになるが、一か月するとまた元のとおりに……。隣にいる健太はすごく熱心に取り組んでいるが、ぼくは身が入らない。

「健太、よくそんなにごみ拾いができるな。」

「だって、ごみを拾ってその場所がきれいになると、達成感があるじゃないか。」

「そうかなあ。ちょっと拾っても、また誰かごみを平気で捨てるじゃないか。これって意味あるのかなあ。」

「でも、一人一人が拾えば、またきれいになるだろ」



そういう健太の顔は、すがすがしい。健太の言うことは分かるが、僕はどうしてもそういう気にはなれない。

そういうえば、同居しているじいちゃんは、「権現堂桜堤保存会」に入って、一生懸命、権現堂堤のごみ拾いや花の手入れをしている。

「もう年なんだから、無理しないほうがいいんじゃない。」

と心配して声をかけるが、じいちゃんはきまって、大丈夫だ、と言って聞かず、定期的に保存会の活動に出かけていく。僕は小学生の頃に、ごみ拾いの活動に連れていかれたことがあるが、その活動がいやでしょうがなかった。最近、じいちゃんはよく「腰が痛い」と訴え、体も

「くの字」に曲がってきた。なぜ、腰が痛いのにそこまでごみ拾いや花の手入れをしに行くのか、僕にはよくわからない。

学校から帰ると、じいちゃんはいつものようにいすにどっかりと腰掛け

夕方のニュース番組を見ていた。僕は、かばんを置きながら、

横目で何気なくニュースを見てみると、そこには、どこかで見た風景が映っていた。

「あっ、権現堂だ。桜の季節でもないのに、なぜ権現堂が……。」「どうやら、「あじさいまつり」を特集しているようだ。」

「桜以外にも、権現堂がこんなに注目されてるんだ。」



僕がそうつぶやくと、さらに、驚くべき映像が目に入った。なんと、一瞬ではあるが、じいちゃんが映ったではないか。それは、保存会の人たちと、あじさいの手入れをしている様子だった。

「今、じいちゃんが手入れしてたあじさいなあ、元々はうちの庭で咲いていたあじさいなんだぞ。」
じっとニュースを見ていたじいちゃんが口を開いた。

「えっ。」

僕は、どういうことかわからなかった。確かに、うちの庭には昔からあじさいが植えてある。

「あれは、もう二十年以上前になるかな。権現堂にあじさいを植えようって話になってなあ。うちに咲いているあじさいを一株分けて植えたんだ。その株を毎年丁寧に手入れしたら、どんどん育ってなあ。立派になっただろ。」

「権現堂といったら、桜でしょ。なんであじさいを植えようなんてことになったの。」
そんな疑問を投げかけると、じいちゃんが、ゆっくり語り始めた。

「権現堂はなあ、昔から桜が有名で、春には多くの人でにぎわったんだ。そして、夏には蛍が飛んでたし、きれいな小川でさんざん遊んだんだ。俺の小さいころは、いつ行ってもいい場所だった。」

「ふうん。そうだったんだ。」

「だけどなあ、しばらく経つと、権現堂は、だんだんと春以外は草ぼうぼうで荒れるようになってしまったんだよ。ごみものすごく多くてなあ。とてもじゃないけど、みんなが来たいと思う場所じゃなくなってしまったんだよ。」

「そんなひどくなっちゃったの。」

「うん。それが寂しくてなあ。俺の仲間も同じ思いだった。そこで考えたのが、『あじさい』を植えることなんだ。必要になってくるお金もほとんどなかったから、いろんな人があじさいを持ち寄ってな。その一つが、うちのあじさいなんだよ。」

「うちのあじさいが、権現堂の役に立っていたんだ。」

「知ってるか？桜だって、戦争中に切り取られて薪として使われてしまったんだ。それをなあ、戦後、俺のおやじたちが桜を一本一本植えて復活させたんだ。俺らもちょっと頑張ってみようと思ってるなあ。」

初めて聞く話ばかりだった。亡くなったひいじいちゃんは桜を植え、そして、じいちゃんは、うちのあじさいを植えて、権現堂で育てていたなんて……。

「そこで、『権現堂桜堤保存会』をつくって、本腰を入れて

『昔の権現堂を取り戻そう』って活動し始めたんだ。みんなで

ごみ拾いをしたり、※まんじゅしやげ曼殊沙華や水仙、最近ではひまわりまで

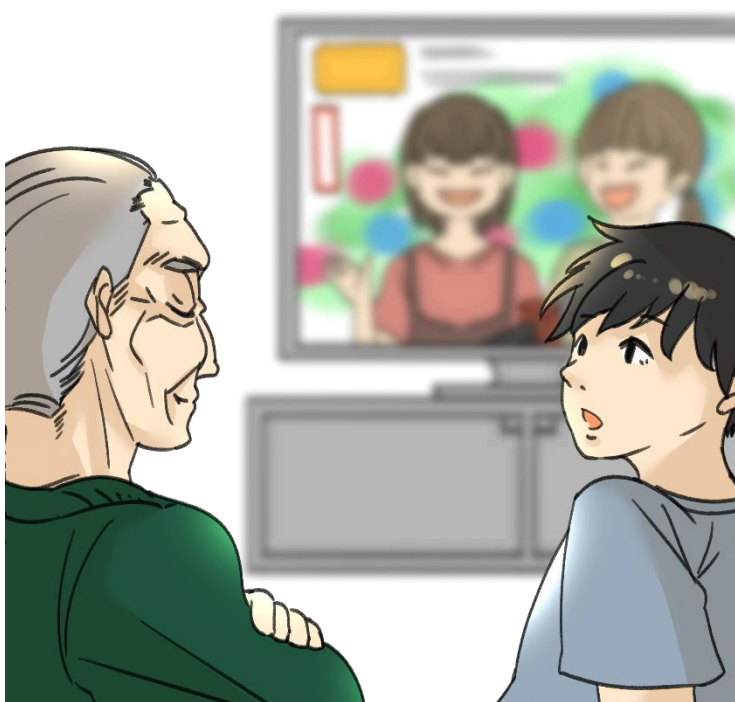
植えたりしてな。」

「そんないきさつがあったんだ。」

「そうだよ。桜にも寿命があつて、今では伐採しなきゃいけないのも出てきた。だから、『保存』だけじゃなくて、未来に向けて

『再生』もしていかないといけないって話し合ってるんだ。」

普段はめったに自分から話すことなんてないのに、いつになくうれしそうに語っている。テレビには、あじさいを見に来た観光客の笑顔が映し出されている。



※曼殊沙華…彼岸花のこと

「うちのあじさいを一株分けて植えるのなんて、庭いじりが好きな俺からすれば、何てことないことだった。正直、植え始めた頃は、あじさいがこんなに注目されるようになるとは夢にも思わなかったよ。ごみも、一人一人が拾ったお陰でだんだん減ってきた。昔のようなきれいな権現堂になってきたよ。」

画面の中の観光客の笑顔を見て、いつも無表情なじいちゃんにも自然と笑みがこぼれる。

じいちゃんが、桜堤保存会の活動に一生懸命になる理由が、少しだけわかった。

ふと、健太の「一人一人が拾えばきれいになる」という言葉を思い出す。じいちゃんの思いも健太の思いも、ひいじいちゃんの思いも、どうも重なる部分があるような気がしてきた。

自分の家族が植えた桜とあじさい、そして、自分たちがきれいにした街並み。未来に向かってそれぞれが美しく輝く。そんな光景が僕の頭の中に広がり、少し誇らしい気持ちになる。今度、保存会の活動に久々に参加してみようか……。何気なく過ごしてきた自分の住む地域が、今までとは何だか違うものとして僕の心の中に浮かび上がってきた。



